

## フランスにおける歴史地理学の沿革

菊地 一 雅

フランスにおける歴史地理学の発達を考える場合には、まずそれを生み出した基盤としての近代フランス人文地理学の特質を考えなければならないと思う。

フランスにおいては、地理学会の創設は欧州で最も早く、イギリス・ドイツにさきがけて、すでに一八二一年「パリ地理学会」*Société de Géographie de Paris* がつくられている。しかし、当時はフランスも大革命・ナポレオンの出現による対外戦争の直後のため、未だ共和国としての地位は定らず、更に七月・二月革命と不安定な政状が続いて幾多の問題が山積している時代であった。

一八七〇年以降、第三共和国としての基礎が確立して、革命以来百年を経過してから、地理学もフランス革命百年祭に賑う歴史学会と歩調を合はせ、次第に学問的に整備されて来た。それは九一年にいたって中央機関紙である「地理学報」*Annale de Géographie* (Paris 第五刊) が、老舗であるアルマン・コラン *Librairie Armand Colin* から刊行されるに至ったことによっても肯定出来よう。更に一八九八年にポール・ヴィダル・ド・ラブラーシュ *Poul Vidal de la Blache* がソルボンヌ *Sorbonne* に就任することによって、形式的には近代フランスの地理学の確立がなさ

れるに至った。

フランスの人文地理学確立は、先ずドイツの地理学体系に対する批判から始まらなければならない。当時指導的立場にあったドイツ人文地理学において、リッターK. Ritterの学説を正しく受け継ぐものはラッツェルF. Ratzelであったことは異論はあるまい。ラッツェルの根本思想としては、人間の活動をもって、一義的に自然環境によって決定されると考える地理的唯物論思想が根本となっており、その方法は、人間がその上に居住する土地によって、運命的に決定されるところの、地表上における人間の分布と発展の法則を幾何学的正確さをもって樹立することであった。

この場合彼にあっては、人間と国家とは全く地理的条件に依存するものと考えられ、人間の意思と創意には何等の信頼も与えられない。

彼のいう所によれば、盲目的な力をもって人間の運命を左右するもの々は他ならぬ土地そのものであり、「人間は運命が彼に与える土地の上に生き、法則に従いながら、そこに死ななければならぬ」のである。

由来、人文地理学はかかるラッツェルの考えのもとに、すぐれて影響せしめられ、形成せしめられたが、一九世紀末から二十世紀初頭にかけては、このようなラッツェルの独断に対して、また単なる因果関係に対して種々の抗議と批判となされるにいたった。

それは資本主義社会が益々発達した段階にあって、かつて素朴な市民的的思想形態の一翼をになった地理的唯物思想が当面した当然の帰結であった。

さて近代フランス人文地理学の祖といわれるヴィダル・ド・ラ・ブラーシュは、最初歴史から出発したが、彼はさきのラッツェルの所謂決定論の批判者と考えられる。

彼から伝えられた貴重な遺産は (一) 人類と自然との間の諸関係を人文地理学の主題とすること、(二) 生物地理学的方法に立脚すること (三) 歴史的見地の重要性を素直に承認することの三点にあるとされる。しかし、これは、必要するに、土地と有機物の相関的諸現象の因果関係を究明することから始まると考えられる。彼によればもとよりかかる諸現象は地球総体に対して、つながりを有するものであり、地的統一によらなければ説明しがたい自然的諸条件の結合関係が、地球の各部分において作り出しているところの環境に關聯して来るものであった。この環境については、生態学上、即ち、唯一にして同一なる場所に生活する総ゆる有機体の相互関係、彼等を圍繞している環境に対する適応現象からみて、その関係は唯に植物のみならず、動物人間にも適用されるものである。

彼は言っている、「勿論、動物は移動する力を与えられており、人間は知能を具えているのであるから、周囲の環境に反応するためには、植物よりも一層よく武装されている。しかしながら、この環境 (milieu) という言葉の意味する一切、即ち、われわれを取り巻く緯を織りなしている思いもよらぬ糸すぢの悉くを反省してみるならば、一体それから免れて生きられる生きた有機体があり得るであろうか」と。

人類にあつては、非常にはやくから世界各地に普及していったという既成の事実から、動植物と同様人類には甚だ多岐に亘つて、かかる環境に適応現象が現われていた生存の原始的形態は、そして各々の環境に住む人々は、環境のある一定の条件の中に据えられた人々が行動させられた場合に、社会生活を営むことが出来る必然的な関連を有したわけである。

かくして生存を評された人類の社会集団は、植物や動物の社会集団と同じく、環境の影響に服せしめられた雑多な要素をもって組成されている。彼によれば人類の自然環境に対する関係を探求する場合は、環境の直接的効果以外に

多くの要因を斟酌しなければならぬ。そして人間の活動的である全ゆる人間の事實は環境の支配によって説明することは出来ない。それは環境に対する人間の反応、主として適応性、その時その時の社会的伝習によって条件づけられるものである。

環境の影響は、高度の社会にゆけばゆくほど孤立状態に閉ぢこめられているような社会に比して、遙かに直接的でない徴候をもって現われるであろうが、しかし、社会が複雑であるために遙か看取し難いことは争われぬにしても、矢張り存在している。かかる外部から齎らされた夥しい諸影響が参加しているわけで、これが何世紀にもわたって、絶えず各世代の相続財産を豊富ならしめ、そこに新たな要求と共に、新たな創意の胚胎をもち統括して来ているのである。我々人類は、その肉体の生理的な機能を通じて、自然と交渉をもつと同時に、また社会的な生産過程を媒介として、自然と交渉している。したがって彼はこの場合、社会的な生産過程が歴史的な発展に従っているならば、人類社会と自然との交渉関係は、歴史的な発展の相において、把握せられるべきであり、自然的条件なるものの具体的な内容は、歴史的に限定せられたものとしてのみ、正当に理解せられであろうと考える。

彼の社会ダーヴィニズムは、人間社会の発展を環境に生物学的に適應してゆく過程にみ、その意味で偶然性を排除するが、相対的に不変な動物本能と人間とを同一視し、その歴史性、歴史的被規定性を認識せぬところから、出發している。つまり社会的なものと生物学的なものとの範疇的區別、人間の社会生活 *das gesellige Leben* の産物たる社会の労働について黙して語っていない。しかし、人間は原始的な時代にあつても、自然的器官をもって、自然に適應する動作の如きものではなく、自身の労働によっては部分的にはあるが、自然的環境を自己の目的に役立てて来たところに、生物学的適應とは異なるものがある。

こうして、一定の歴史的限界をもちつつも、彼の学風は第三共和国の中で受け継がれ、以後、フランス人文地理学界の主導的勢力となり幾多の門下を輩出させて行つた。

彼の学風が余りにも幅が広いものであったにせよ、人文地理学を異つた観点から考察せんとする学者も居らぬことはなかつた。

この方向を示して人間の心理主義におち入つたのはブリュンヌ J. Brunhes である。彼は偶然論的可能論の立場にたつ。

彼は人間生活の基本的要求 *besoins* から発して、心理作用は地理学的現象の発生に際しては自然との間の必要な媒介者であつて、ベルグソンのいう一般的な表現に従えば「注意の方向」*direction of attention* によるものと考えた。

即ち、地理的現象が人間に及ぼす影響の上からみるときは、それら諸現象は純自然的、地理学的見地と全く異つた方法によつて分類せねばならない。これ等の現象が、人間としてある要求を満すべき本能的、あるいは伝統的誘惑を感じしむる心理的效果をも認識せねばならぬ。これなくして人文地理学の現象は、地理学的原因のみではその完全な理解は勿論、その統一の原理さえも見出すことが出来ないことを忘れてはならぬと考える。彼によれば人文地理学は妥協の世界であつて、総ゆる生活を許さないようなある限界を決定する一般的法則や基本的条件をのぞけば、地球上においては人間に対して絶対的とか、決定的とかいうものは何もないと「心理的相対主義」におちいつている。

だがフランスの人文地理学はよくブラーシユの正しき面を継承し、代表的存在としてドマンジョン等によつて引き

継がれていった。

なおここで、人文地理学建設の協力者として忘れてはならぬ人に、ガロワ Lucien Gallois がいる。彼ははじめリヨンの大学に教鞭をとり、次いでヴィダル・ド・ラ・ブラーシュをエニール・ノルマル・シュペリユールに助け、大地理学者の隻腕として働いたものであるが、彼の後を襲って教授となり、次いでソルボンヌの教授に聘せられ、地理学教授の筆頭であった。

さてブラーシュの地理学を継ぐ双壁は、ドマンジョン Albert Domangeon とマルトンヌ Emmanuel de Martine である。この二ツフランス地理学の動向は、前者のブラーシュの立場に立つものと、歴史地理学派の系統をすてて、地形の研究に貢献した後者によってハッキリ二大主流を形成するに至ったことは特筆さるべきである。

ドマンジョンはまさに、ブラーシュの後を継ぐにふさはしい鬼才であった。彼はパリ大学教授として活躍したが、伝えられるところによると、フランスの大学生で彼の授業に感嘆せぬものはなく il est très fort といわぬ者はなかつたそうである。彼を筆頭とする人文地理学者は極めて多い。ここで一応、彼の業績から概観してみると、博士論文は、ピカルディの地誌

### La Picardie et les régions voisines

Paris Armand Colin 1905

であつて、フランス国内の地域を取り扱つた最初のしかも最もすぐれた地誌 Monographie である。爾来、フランスの地誌を取扱うものは、何れもそれを範例とせざるを得ない。地域についての人文地理学的考察の決定的労作であると思はれてしかるべきものであろう。次いで、第二の労作は

Les sources de la géographie de la France aux archives nationales Paris 1905

これは国立記録古文書保存文庫 Archives National の利用に関する論文で、有益な研究手段を指示するものである。彼は矢張りグエニール・ノルマン・シュペリユールの出身である。卒業して漸らくランス Remis 及びアミアン Amiens のリセーに地理及び歴史を教授したが、間もなくリール Lille の大学に招聘せられ、更に一九一二年にパリ大学に招聘せられた。

ここで、注目すべきは、フランス北部の都市リールに滞在中、彼はその地理学研究所の発展に努力し、理学部地質学研究所、又、北部地質学会及びリール地理学会と密接な関係を結び、地方地理研究の一派を創めたことである。かかる研究のいきさつをみても、その附近のピカルデイの研究の輝かしい名著を発表するに至ったことは故なしとしない。

なお、余談ではあるが、現在フランス革命史の農民分解を研究する際、最高水準を示す本としてジュールジュールフェール G. Lefebvre 尤も彼はリールに生まれ、またかつて、リールのリセで教壇に立ったこともあるが一の博士論文で一九二四年にストラスブール大学教授時代に出された「ノール県の研究」 *Kes Paysans Nord pendant la Révolution française* があるがこれが矢張り、ドマンジョンの研究とほぼ同一の北部フランドル地方を対象とし、且つ又彼がつくった研究設備を思い浮べると、そこには何かしらの関聯が見出せるのではあるまいか。

彼、ドマンジョンの業績は、その他「地理学年報」に発表された諸論文にみられるごとくすこぶる大きい。その上、ブラーシユの死後グパリ「地理学年報」編輯者の一人となり、又例の「世界地理」*Géographie Universelle* にフランスのほか英国・ベルギー・和蘭を執筆していることも又、既知の事項に属するものである。

ブラーシユの高弟として、著名な学者にブランシヤール Raoul Blanchard がいるが、彼にはフランドルについての地誌があり、(La Frandre; Etude Géographique de la Plaine flamande, en France, Belgique et Hollande Paris, Armand Colin 1906) これはリールのリセ在職中の産物である。

彼は、グルノーブル Grenoble 大学に招聘せられてから、アルプス地理研究所を建て、アルプスの自然地理的研究を発表したが、後次第に人文地理的研究に没頭し、その著書には

Grenoble; Etude de Geographie urbaine, Paris, Armand Colin 1911

等がある。例の「世界地理」には中央及び西部アジアを執筆している。

又彼の高弟としては、J. Blache がいる。彼はシャルトルーズ Chartreuse 及びヴェルコール Vercors の地誌を研究し、ブランシヤールの下に助教授として働いた人である。

次にゴーチエ E. F. Gautier であるが、彼はマダガスカル其自然地理の著作にみられるごとく、サハラ及びアトラス地方の研究を専門としているが、しかしながら、人文地理の研究をもおろそかにしたわけでもない。

Charles de Le Roncière ロンシエールはパリ国立図書館のコンセルヴァターを務めた人であるが、旧来の歴史派を代表する一人である。歴史地理・地理学史の権威であつて、彼はフランスにおいて、旧来の歴史観を代表する一人である。地理学会議でなした講演 Manuscripts Perdus de Voyageurs français des X<sup>e</sup> et X<sup>e</sup> siècles は注目すべきである。又文部省における「歴史的科学研究委員会地理部」

(Section de Géographie du comité des Travaux Historiques et Scientifiques) の幹事でもあり、国立図書館 Bibliothèque nationale を背景とする博学の士である。



きて、ブラーシユ門下の逸材マルトンヌガリヨンに招かれて、レーンを去った後、ウアーシユエ Antoine Vacher が後をついだが、彼も一九一二年リールに去った。このためレーニンの大学は暫く教授を欠いたが、一九一八年に至って、その地理学教授に任命せられたのがミュッセ René Musset である。彼の博士論文は「バ・メーヌ」の研究 Le Bas Maine; Etude géographique, Paris Armand Colin 1917 である。

これはちぢのドマンシヨンの「ピカルデー」をモデルとした完全なる地誌といふべく、この地方の自然地理についてもまた、その経済生活の分析においても、頗る独創に富んだ労作である。

彼はこれをパリ大学文学部に提出し、一九一七年文学博士となり、翌年レーン Laon の教授となつたのである。

副論文は

Del' élevage du cheval en France, Paris 1917 である。その他、ヘルシユに関する重要な論文をパリ「地理学年報」に発表してゐる。

Le Perche, Ann. de Géogr. 28, 1919, 342—359

La relief du Perche, ibid 29, 1920, 91—126 等がある。

こゝした業績に比すべき学者としてはシオン Jule Sion がいる。彼の博士論文は東部ノルマンデーにおける田園に関する研究

Les Paysans de la Normandie Orientale, Pays de Caux, Bray, Vexin norwand, Vallée de la Seine;

Etude Géographique Paris Armand Colin, 1909 である。同地の田園生活を歴史的に描写した点に特色があり、その分析の正確にして徹底させることにおいて匹敵するものなく、現在歴史学を研究するものにとつてもルフェーブルと

共に最も完備せる研究書となつてゐる。

ちなみに彼の主著の内容をみると、

- 1、東部ノルマンジー
- 2、自然的環境 気候
- 3、〃 土地と水
- 4、住民の諸起源
- 5、中世におけるノルマンの村落
- 6、十八世紀の田園の産業
- 7、森林沼地曠野牧場（十八世紀のコンミューン）
- 8、十八世紀の農業技術と生産
- 9、〃 土地所有と経営
- 10、〃 住民
- 11、現代の田園の産業
- 12、土地征服の完成
- 13、現代の農業技術と生産
- 14、諸所有地と諸経営
- 15、現在の住民

## 16、田園居住

の順となつて、自然法則に従う人間活動は文明の状態によって更新され変化してゆくことを克明に論じている。

彼はこれをパリ大学文学部に提出して、文学博士の学位を得た。その副論文はヴァールの自然地理に関する研究 *La Var supérieur*; Paris Armand Colin 1909 である。後モンペリエ Montpellier の教授となり例の「世界地理」にモンヌーンマシアを執筆している。

この時代はまさに百花爛漫の形で地理学の研究は各方面にわたつて行われた。人文地理学者の着実なモノグラフィ―は歴史学研究の上からいっても極めて価値の高い、むしろ当時の歴史学をリードするものであった。

次に「地理学年報」から主な歴史地理の論文をあげてみると、アルデンヌの森林の歴史地理的考察として *La Forêt l'Ardenne*; Léon Boutry 1920,

一九二二年になると

*Le Pilote Arabe de Vascode Gama et les instructions nautiques des Arabes au XV<sup>e</sup> siècles*; Gabriel Ferrand. 1922.

アルプスの道路の研究として

*Les Routes des Alpes Occidentales*; A Demanglon.

等々が見出されるが、注目されるべきは社会経済的問題意識をもった歴史地理のスペシャリストであるルシアンフェーブル Lucien Febvre によつて「大地と人類の進化」*La Terre et l'Evolution Humaine*; Introduction Géographique à l'Histoire が出版されていることである。彼は後にドマンジョンと共著で「ライン河」―歴史経済の諸

問題—Le Rhin; problems d'histoire et d'économie. 1935. を著しているが、ともに歴史地理学の絶好の書といえよう。この本は一つは歴史的な面からラインの交通系統・自然境界・二つの人種の交錯・ローマ的景観・ゲルマン的景観・教会などをインディケーターとしてとりあげ、この河谷の歴史地理を概観するとともに、経済・交通を主として交通動脈としてのラインの性格を明らかにしたものである。

次として A Geographical Introduction to history (英訳本出版1925)

の大著があるが、その序文でアンリベル Henri Bertrand が述べている「フエーブルは研究領域において科学的正確さをつねに考えた。彼は人間の個体に対する環境の直接的作用を否定はしないが、それに深入りすることをさけ、この問題を厳密に分離させた。」「フエーブルは機械主義と Finalism を信用しない。」「彼は歴史における Chance の観念を強調する。しかし純粹の Chance と歴史的偶然との間に、明らかな一線を劃する。」

等々の考察は、彼の考えを端的に表現したものであるとして興味あることである。

ところで、フエーブルに至ると、人文地理の目的について更に鋭く追求する。

彼は「同一条件にして同一の結果あり」との因果関係に出發して、決定的な原因とはある一つの現象を決定しているところの現象的な諸条件總体の謂であり、つまり「諸条件の無限の合計」からなるが、これを地理学者にあてはめてみた場合、抽象的な諸条件に本当に到着することが可能であろうかと自問する。しかるに現在の地理学者は、凡そ体系的な演繹に類することは避けるように益々努力しており、彼等の研究すべき事実の諸状況を、先入観念や理論的な単純化への偏った執着無しにただ分析するのみに止めようとし、それによって、機械的な決定論の狭量な見解を振りすてることに全力をそそいでいることを嘆いている。しかし彼はそれに対する具体的な解決を興えていない。むしろ、

再びブラーシユの命題たる「地理学は場所の科学であつて、人間の科学ではない」にかえることによつて、再出發を願つてゐる。だが彼は今日の地理学者達が何を惜いても、明瞭にしようとするのは、人間に備わる創意と移動性であると考えた。そして彼は、歴史的な個体の上に重くのしかかる四通りか五通りの地理的大宿命といったようなものの厳格な劃一的な影響力などはなく、唯あるのは、土地とか氣候とか植物とかに限らず、あらゆる瞬間において、そして、それらの存在のあらゆる表現において、且つまた個立的にせよあるいは集团的にせよ、人間という創意に恵まれた生き物をもつて、限りなく柔軟なしかも執拗なる媒介者とする事によつて、これらの影響は現われると考へて人間の再認識をする。

ヴィダル・ド・ラブラーシユに始まる近代の人文地理学に対する彼の学風の影響は余りにも大きなものであつた。そしてそれは第三共和国という温床にあつてぬくぬくと育つていった。しかし、進歩のきざしは次第に現われ、自然と人間とを廻つて悩みという形で増大した。ルシアン・フェーブルもそうした悩みを最もよく感ずる一人であつた。にもかかわらず、あるいは社会形態学等の側から抗議をうけ、一方には近代人文地理学そのものが持つ悩みから地理学は分化の一路を辿つていった。フランスの地理学的無概念性は現代欧州の悩みと共に歩むであろうか。

さて再び「地理学年報」に話をもどしてみると、一九二三年には

Relations de l'Irlande avec la Grande Bretagne A. Demangeon 1923

Le Pays d'Auge M. Reinhard 1923

その他同年にはポーランドに關して、

La Pologne P. Carneva d'Almeida があるが、一応完結した好論文である。またアンシャンレジーム末期をあ

つかった Les Grandes fermes entre Paris et la Beauce Ferrand Evrard 14 Les Substances dans le District de Versailles A Defresne と共著と共にパリ盆地の研究の上からいつて重要である。この地方の研究書は他に若干年代は下るが、ドマンジヨンの愛嬢 Suzanne Demangeon の L'approvisionnement de Paris en Fruits et Légumes 1928 と大体同地域を対象とした Michel Phipponneau による L'a Vie rurale de la Baigne Parisienne をもつて加えねばなるまい。

その他有史以前のものとして

Sur la Géographie préhistorique P. Deffontaines 1924.

があげられる。

又一九三〇年には、ドマンジヨンは

L'industrie houillère en Grande Bretagne au XVIII<sup>e</sup> siècle を発表し、相変らず健筆を誇っている。

Orléans et L'ancienne Navigation de la Loire; Roger Dion A. G. 1938

は L'information Géographique Orléans; Essai de géographie urbaine E. Ingrain 1953 のそれと共に交通点見地からロワール河とオルレマンの関係を主として取り扱ったものとして興味ある論文である。なお、ロワールの歴史地理的研究としてディオオン (R. Dion) の Le Val de Loire (1934) がある。

これは自然の記述を主として河谷の性格をのべ、さらに洪水による被害や村落の経済生活を記したものである。

その後第二次大戦の悲劇により学問研究は一時中断された感があるが、最近にいたると歴史地理として注目すべき論文は、ヴァイキングの発見したという新大陸 Vinland の地理的位置の考証 V. Tanner; Vinland. Les Plus anci-

ens rapports de L'homme Blanc et du Nouveau monde (A.G. 1949) があげられる。

五〇年とせ

Leon Aufrere

Introduction à l'étude morphologique et Démographique de l'Avenue des Champs-Élysées Moreau J.P.

Questems Agricoles en Basse-Bourgogne au XVIII siècle

がある。前者は都市地理を歴史的に扱ったもので、シヤンゼリゼ通りの歴史的発達を述べたものである。

北部フランスの二圃制農業の分布を歴史的社会的条件に求めた論文としてはエチエンヌ・ジイヤール Etienne Juillard の Bunnel dans l'Agriculture Septentrionale A.G. 1952

移民の問題について、とくに一八七六年以来のものを扱ったものとして Les migrations italiennes à travers les Alpes; G. Acher, A. G. 1955

五六年にはモゼル県へのアルゼリヤ人の移住をテーマとした André Michel; L'immigration algérienne en Moselle

農村における土地と人間の関係を全世界に亘って総括し、歴史的環境の下に地域によってさまざまの田園が作り上げられている事を分析している。

Pierre George; La Campagne, le Fait Rural à travers le Monde

さきのシオンの研究の地方について、更に年代的にも突っ込んだ研究をなしたものととして Armand Frémont; La Partie Occidentale du Caux (La region du Haute,) の論文があらわれた。

以上、極く大きっぱに概観したが、その他にここに揚げない多くの論文からも推測されるところによると、ブラーシユの学風を汲む歴史地理の研究対象は、すこぶる多岐に亘っていることが特徴である。しかし、研究上、最も重要なものは、地域的には、フランス及び西部地方、即ちティピカルな意味合いで資本主義的農業が発展した個処であると思われるが、幸いなことに、すぐれた先学の研究は主として、この地方を対象としていることである。

なおフランスの歴史地理を学ぶものにとって、過去の住民の大部分を占めるのは農民であつたから、農民問題に対する歴史的知識は不可欠である。これを補うものとしては

ルーブネル Gaston Roupnel の *Histoire de la Campagne Française* (1936) 及びドーズ Albert Danzat の *La Vie rurale en France* 等があり、いずれも比較的入手が容易で恰好の書といえよう。

最後に資料の点については誰もが持つ共通の悩みであるが、この点について、それぞれの目的で集めた各学校の圖書の他に、日仏会館及び東京、関西（京大前）の各日仏学院の圖書殆んど原書を利用せられると良いと思う。施設ともその圖書数は可成りあり、又必ずしも学問的な面からのみのコレクションとも思えないが、思わぬ圖書を見することもあろう。